「生徒の成長が目に見えるのがうれしい。先生方も，いろいろと指導を工夫しています」と話す安部元彦校長

日々の実践で、あいさつやマナーが身に付く、変われたことが自信になる

安部学院高等学校

（東京都北区）

閑静な住宅街にある安部学院高等学校では369名の女子生徒が学んでいる。「成績のよさだけで社会に出られるわけではない。きちんとしたマナーを身に付けてこそ、社会人として自立できる」と、創立以来、あいさつをはじめとする礼儀作法を重視してきた同校での教育について伺った。

都内唯一の女子商業高等学校である安部学院高等学校

気持ちのよいあいさつが社会人としての基本

安部学院高等学校は令和2年に創立満80年を迎える。創立以来、女性の職業的自立を目指し教育を行ってきた同校で、最も大切にしてきたのはあいさつをはじめとする礼儀作法だ。

安部元彦校長は次のように説明する。

「私の祖父は、まだ男女間の社会的地位の差が大きかった頃に女子教育を掲げて本校を創設しました。そのときから一番の目標としてきたのは、人と会ったら気持ちよくあいさつできる人間を育成することです。これはどのような職業についても必要なこと、社会人としてのスタートです」。

同校では「おはようございます」「さようなら」「ありがとうございます」「ごめんなさい（すみません）」「（名前を呼ばれたら）はい」の五つのあいさつを徹底している。

「入学式後の2日間にオリエンテーションがあり、そこであいさつとお辞儀の仕方を指導します」と本橋晴菜先生は言う。どのようなときに、どの角度でお辞儀をするか。角度を細かく決めて、違いを理解させる。その後はあらゆる授業内でお辞儀を習慣化させていく。

「私は英語科の教員ですが、もちろん授業ではきちんと開始時と終了時のあいさつとお辞儀を指導します。最初のうちはカウントしながらきちんとしたお辞儀を身に付けさせ、慣れて少しだれてきたときにはできるまでやり直しをさせるなど、大切さを理解し身に付けられるよう、日頃から徹底しています」（本橋先生）。

商業教育を行ってきた同校では実務に関する検定資格を一つでも多く、一つでも上の級を取得できるよう指導してきたが、10年ほど前、教員の間からマナー指導の一環として「秘書検定とサービス接遇検定を導入してはどうか」という意見が持ち上がったという。

「先生方が内容を調べてくれたのですが、まさにわれわれの教育目標にぴったり合っていると思い、商業の実務に関する資格とともに目標として導入することにしたのです。全国で一斉に行われる試験ですから、合格が自信にもなると考えています」（安部校長）。

齋藤ほのか先生は同校の卒業生であり、導入された最初の年に秘書検定を学んだ。教員に

（左から）本橋晴菜先生，齋藤ほのか先生

なって4年目の今は、後輩でもある生徒たちに秘書検定・サービス接遇検定を指導している。2年生は秘書検定3級、3年生はサービス接遇検定3級の合格が目標だ。

「先生が実演を交えて教えてくださったことがとても印象に残っています。実技も多く取り入れ、単なる筆記試験対策ではなく、どのような場面でどのような敬語を使うか動きもつけて教えてくださったり、電話機を使ってロールプレイングをしたり。検定に合格するだけでなく、実際にできるようになることが大切なのだと感じました。今も、私が在学していた頃から変わらず〝全員で受験する〟のもよいところ。仲間がいるからこそ、くじけず取り組めていると思います」（齋藤先生）。

同校は2年生からビジネスコースと会計コースに分かれ、ビジネスコースでは2年生の「課題研究」で秘書検定、3年生の「課題研究」でサービス接遇検定を題材に指導している。会計コースは「課題研究」がないため自分で勉強しなければならないが、「国語で敬語などの言葉遣いを、家庭科で冠婚葬祭やお茶出しを、私が担当する英語では一般常識のカタカナ語をと、それぞれの科目内で関連する項目を指導。さまざまな授業を通して、大人として必要なことを学んでもらえるよう意識しています」と本橋先生。商業科目以外の教員にも、秘書検定、サービス接遇検定が同校の目標と合致していることがよく共有されているようだ。

「マナーは実生活にも密接に関係します。以前は95％以上の生徒が就職しましたが、今はほとんどが進学希望で、卒業後にすぐ就職するのは20％程度。しかし、大学や専門学校を経て、いずれ社会に出ることは間違いありません。ここでしっかりチャレンジし、マナーを身に付けておくことは必ず役に立つはずです」（安部校長）。

保護者会や学校説明会が在校生の実践の場に

マナーは一朝一夕では身に付かない。分かっていてもできない状態から、自然にできる状態に至るよう、同校では授業などで学んだマナーを実践する場をさまざまな形で設けている。一つは2年生が全員持ち回りで担当する「職員室当番」。朝のHR開始前の8時に登校し、職員室で先生方の机を拭いたり、お茶を出したりするのだ。放課後にはゴミ捨て、湯飲みの洗浄なども行う。

また、保護者会や学校説明会をはじめ、来客応対の機会にも、生徒が案内や誘導の係として活動する。

「教室まで案内するとき、黙ったままでいるより何か声を掛けた方がよいでしょう。そこで言葉遣いや態度などを、生徒たちは自分なりに試行錯誤しているようです。学校内なら失敗しても教員がフォローできます。ここでしっかり体験して次につなげてほしいです」（齋藤先生）。

「保護者を案内している生徒と擦れ違うと、私が何か言う前から『こちらは本校の校長です』と紹介してくれます。最初は驚きました。担当の教員がそう言うように指導しているようなのですが、そうやって紹介されると、その日は出番がなくても話すきっかけができます。あいさつや紹介が会話につながることを、生徒もよく実感してくれているようです」（安部校長）。

保護者の監督の元でアルバイトをする生徒も多く、それもまた実践の場となっている。生徒たちは同校での学びをどのように感じているのだろうか。

（左から）2年生の大柳亜湖さん，藤浦優希さん，3年生の山口虹恋さん。山口さんは卒業後は日本郵便株式会社で働く予定。「お客さまに安心してもらえるような窓口対応を心掛けたいです」と話す

最新事情 47……安部学院高等学校

会計コース2年生の大柳亜湖（あこ）さんは、「スーパーマーケットでレジ係のアルバイトをしていますが、先生方から教わったお辞儀を思い出し、お客さまを見送るときはあいさつとお辞儀を一緒にしないように気を付けています。年配のお客さまが話し掛けてくださることも多いのですが、戸惑わず、笑顔で失礼にならない言葉遣いで世間話ができるようになり、コミュニケーション力が付いたと思います。社会に出ればいろんな個性豊かな人と接することになります。秘書検定で学んだことを思い出し、相手の気持ちを考えて対応していきたいです」。

同じく2年生でビジネスコースの藤浦優希（ゆうき）さんは「マナーを学ぶまでは、相手のことまで考えていなかったと思います。職員室当番でのお茶出しも、最初は自分ならこれくらい飲むかなという量を入れていました。そこで先生に『入れ過ぎだ』と言われ、ちょうどよい量があることに気付きました。それからは八分目を意識しています。生きていくには人と関わることが絶対必要。失敗もあると思いますが、秘書検定で学んだことを思い出しながらチャレンジして、よい人間関係が築けるようになっていきたいです」。

2年生は持ち回りで職員室当番を担当。秘書検定で学んだことを活かし，先生方へのお茶出しや，机を拭いたりゴミを捨てたりといった環境整備を行う。これら全て実践の場だ

ビジネスコース3年生の山口虹恋（にこ）さんは、卒業後は、日本郵便株式会社への就職が決まっている。「職場見学で、いつも通りにしていたあいさつとお辞儀を褒められてうれしかったです。しっかり体に染み込んで、当たり前になっていたのだなと思いました。最初は人と関わるのが苦手で、こちらから積極的にコミュニケーションがとれませんでした。学校説明会や保護者会で先生以外の大人の人と話す機会があって、前より緊張しなくなりました。秘書検定、サービス接遇検定を学び、話し方に苦労しなくなったおかげだと思います」。

一歩一歩進み、変わる実感が自信になる

「私は変わった。安部学院で変われた」――先生方の名刺の裏にはこの言葉が書かれている。齋藤先生の発案だそうだ。その言葉は、先生方から生徒へのメッセージでもある。

同校に入学してくる生徒の中には、中学校で勉強や登校に苦労した生徒もいる。しかし、同校でマナーや人との関わり方を学ぶことで、家でもあいさつをきちんとするようになり、3年間皆勤を目指してくれるようになるなど、着実に変化は表れるそうだ。最初はなじめなくても、皆で同じ目標に向かって取り組むことで、変わりたいという思いが芽生え、やってみることで少しずつ変わる。保護者にもその変化を感じてもらえていると先生方は言う。

最初は秘書検定が難しく「くじけそうになった」と口をそろえる3人の生徒たち。先生方は何度も補習をしてくれたり、問題用紙に励ましのメッセージを書いてくれたり、頑張れるように支えてくれたと振り返る。

「先生方がこれだけ熱心だということは、それだけ大事なことが書いてあるんだ」「先生方の気持ちに応えたい」と、勉強に実践に頑張った結果が晴れやかな笑顔につながっている。

［上］学校説明会で校内を案内しながら説明する山口さん

［左］生徒たちが積極的に中学生と保護者の案内，誘導を担当している